

「期待」どおりになれないわたしの可能性 —J. バトラーの主体化理論から『アリス・イン・ワンダーランド』を読む 五十嵐舞

はじめに

映画『アリス・イン・ワンダーランド』¹ はルイス・キャロルによる児童文学『不思議の国のアリス』とその続編『鏡の国のアリス』での冒険から13年後のアリスの物語だ。19歳になったアリスは、パーティーの最中にウサギを追いかけて、穴に落ち、アンダーランドへ迷い込む。そこには言葉を話す動物や花、マッドハッター（イカレ帽子屋）、チェシャネコ（笑ったり消えたりできる猫）、アブソレム（青いイモムシ）といった奇妙な住人たちがいた。彼らは、未来の出来事についても描かれた暦に記されている、〈アリス〉² がジャバウォッキー（モンスター）を倒し、赤の女王が恐怖により支配する時代が終わり、再び平和な白の女王の治める時代となる「フラブジャスの日」を待ち望んでいた。しかし13年前にアンダーランドに来たことを忘れ、またアンダーランドを自身の夢の中のものだと思い込んでいるアリスは、状況が飲み込めない。赤の女王がアリスを「打ち首」にしようと追手を放つなかで、結局アリスはジャバウォッキーを倒し、アンダーランドには再び白の女王の時代が訪れ、アリスも自身の世界へと戻る。

本稿は、そのような『アリス・イン・ワンダーランド』におけるアリスという主体の変化を、ジュディス・バトラーの主体化理論の視点からの分析を通して検討したい。「奇妙な」世界におけるものとして描かれる非一貫した身体性と、現実の世界を生きるわたしたちの身体性の関係性を、また、そうした身体性の説明の不可能性に関する思考を通じて、「奇妙な」と「正常な」なものとの境界線を、検討する試みである。

1 アリスから〈アリス〉へ

1.1 アリスという主体の変化

少々長くなるが、『アリス・イン・ワンダーランド』を通してアリスはどのように〈アリス〉へとなるのか、まずは概観したい。

アンダーランドへ迷い込んだ当初、アンダーランドの奇妙な世界を前に戸惑うアリスを見て、「違うアリス」ではないかとアンダーランドの住人たちは話す（19:00）。³ しかし自身が夢の中にいると思っているアリスは住人たちに自分たちの待っている〈アリス〉かと尋ねられても、文脈がつかめない上、そもそも自分の夢のなかで「違うアリス」もなにもないと思っている（19:30）。アリスと住人たちの話がかみ合わない。そこで住人たちは「賢くて完璧な」アブソレムにきくことにする（19:40）。「お前は誰だ」⁴ と問うアブソレムに対して、アリスは“Alice”と答える（20:30）。するとアブソレムは「いずれわかる」と言い、「どういう意味？わたしはわたしが誰か知っているはずよ！」とアリスは言い返す（20:45）。アブソレムは「そのとおり、知っているべきだ。おばかさん。オラキュラムを開いて」と指示する（20:50）。オラキュラムとは「アンダーランドの暦」であって、「はじめの日からの全ての日について教えてくれる」ものである。フラブジャスの日にジャバウォッキーを倒す〈アリス〉の姿が描かれているオラキュラムを見て、「わたしじゃない」と言うアリスへ、「知ってるよ！」とマリアムキン（ヤマネ）は言い、「彼女は“the right Alice”（正しい〈アリス〉）なの？」とアブソレムに訪ね、アブソレムは“Not Hardly”と答える（21:54）。

そのように、アリス自身が否定し、アブソレムが“Not Hardly”と表現するアリスだが、しかしマッドハッターだけは「完璧に〈アリス〉だ。キミは完璧に〈アリス〉だ」と、アリスは〈アリス〉であると断言する（31:30）。

他方で、オラキュラムの内容を知った赤の女王は、アリスを捕まえて「打ち首」にしようとし、迫りくる赤の女王の軍を前に、マッドハッターはアリスを守ろうとする。アリスは、自身も赤の女王に狙われ、また虐げられるアンダーランドの住人たちを見るなかで、半ば必然的に赤の女王と戦っていくことになる（28:15）。

迫りくるフラブジャスの日を前に、不安になるアリスの前にアブソレムが再び「お前は誰だ」と尋ね、「それについては結論が出ていると思うけど。わたしはアリス…でもあの〈アリス〉じゃないわ」と答えるアリスへ、アブソレムは「どうやってわかるんだ」と聞き返し、「あなたがそう言ったんでしょ」と言うアリスへ、「わたしは“Not Hardly”と言ったのだ。しかし今や、お前はよ

り彼女だ。実際、お前は“Almost Alice”だ」とアブソレムは言う（01:10:30）。

フラブジャスの日の前日、オラキュラムを改めて確認しても、そこには〈アリス〉がジャバウォッキーを倒す様子しか描かれていない。アブソレムに「あなたの助けが必要よ。何をしたいかわからない」と言うアリスへ、「お前が、自分が誰かさえもわからないなら、助けられないね、おばかさん」とアブソレムは答え、アリスは、「わたしはばかじゃない！わたしの名前はアリス。[中略]わたしはアリス・キングスレー」と言い返す。「アリスか、とうとう！お前ははじめてここに来たとき、本当にばかだった。私の記憶だと、お前はここをワンダーランドと呼んだ…」とアブソレムが言うと、アリスの中で13年前のアンダーランドでの出来事がよみがえり、「すべて夢じゃなかった！記憶だった！ここは本物なのね！」とアリスは、アンダーランドを現実のものと認識する（01:22:00）。

そしてフラブジャスの日、〈アリス〉として戦うことを決意したアリスは、ジャバウォッキーをヴォーパルの剣で倒し、オラキュラムに描かれた予言は達成され、アリスはオラキュラムに描かれた〈アリス〉と完全に一致する（01:31:00）。

1.2 主体化＝従属化

わたしは前節において、アリスが赤の女王と戦うようになることを「必然的」と表現した。これはすなわちアリスが〈アリス〉となることを「必然的」と表現したにも等しい。では果たしてそれはどういうことだろうか。本章の目的はこのアリスが〈アリス〉となることの「必然性」を考えることにある。

前節で示したように、マッドハッターは最初からアリスが〈アリス〉であると断言し、アリスを〈アリス〉として呼びかけ続ける。また同時にマッドハッターはアリスが〈アリス〉ではないと否定することを認めず、ベイヤード（ブラッドハウンド）もその呼びかけを強化する。（次節を参照）。他方、赤の女王がアリスを執拗に追いかけるのは、アリスを〈アリス〉と考えているからである。すなわち赤の女王がアリスを追いかけるという行為が、赤の女王がアリスを〈アリス〉と名指していることを示す。

バトラーは「批判的にクィア」において、主体の形成を次のように説明する。

発話し、語り、そのことによって言説に影響を生じる「私 (I)」があれば、まずその「私 (I)」に先行する言説、その「私 (I)」を可能にする言説があり、意志の軌道は言語によって作られる。故に、言説の後ろに立って自らの意志や意欲を言説を通して実行する「私 (I)」など存在しない。反対に、「私 (I)」は呼ばれ、名付けられ、アルチュセールの用語で言えば呼びかけ (*interpellate*) を通してのみ存在するようになり、この言説上の構成とは「私 (I)」に先立って存在し、それは「私 (I)」の他動詞的な呼び出しなのである。実際には、話しかけられる範囲においてのみ自らは「私 (I)」と言え、話しかけられることが自らの発話における位置を動員する。逆説的には、社会認識の言説上の状態は、主体の編成に先行しそれを条件付けているのだ。[強調は原文ママ] (Butler, 1993/1997, p. 161)

すなわち、「わたし」は常に他者からの「呼びかけ」を通して可能になり、「わたし」の意志も、先行する言説により規定されているということであり、よって言説に先立って存在し、意志をもつ「わたし」などは存在しないということである。「主体」は、先行する言説の範囲内、すなわち規範の範囲内においてのみ「主体」として存在しうるのだ。

主体化 (*subjection*) は、既にある規範に依存することによって、それが逆説的にも主体の形成を可能にするということから、より厳密には「主体化=従属化」である。繰り返しになるが、主体が主体として成立するためには、その呼びかけを引き受けることが条件付けられているのだ。

よって、アリスはそれが否定すべきことだと思いうにしても、そうした意図に関係なく、既に〈アリス〉として名指すその呼びかけを受けざるを得ない。

他方で、そうした主体化=従属化とは別の次元で、(というよりもむしろ実際には両者は密接に関係しているのだが)、承認をめぐる問題がここに介入してくる。

1.3 嘆かれうるものとしての〈アリス〉

バトラーは生の喪失に関して、「特定の生がそもそも生きているものとして捉えられていない場合、それらの生が傷ついたり失われたりしたことも感知されえない」ということを問う (Butler, 2009=2012, p. 9)。

わたしたちの生は、「失われ、破壊され、あるいは死にいたるまで組織的におざなりにされうる」ものであり、「生が生として維持されるためには、さまざまな社会的、経済的な条件が満たされ」る必要がある (ibid, p. 24)。すなわち、「生は常に他者の手に委ねられている」のだ (ibid, p. 24)。よって、ある生が生きるためには他者によって支えられることを必要としているのだが、それには、その生が「失われれば悲嘆をもたらす」ものであるという「前未来形」が、生が生きるための前提として条件付けられている、という「暗黙の了解」を必要としているのだ (ibid., p. 26)。逆説的には、将来においてその喪失が嘆かれないものであるとき、生は保護されない、他者によって支えられないのである (ibid., p. 26)。

「キミは完璧に〈アリス〉だ」と言ったマッドハッターは、小さくなったアリスを帽子にのせ、赤の女王の手下から逃げながら、白の女王の城へ向かう。その道中「ジャバウォッキの詩」という戦士がジャバウォッキの首をとる詩を口ずさむマッドハッターに「わたしは誰も殺さない。わたしは殺しはやらない。だからそのことは覚えておいて」とアリスが言った途端、アリスを地面へと下ろし立ち去ろうとする (38:00)。

その後、マッドハッターは赤の女王の行った数々のことについて話し、その残虐な出来事にアリスが同情を寄せつつあるところへ、今度は赤の女王の追手が迫ってくる。そこでマッドハッターはアリスを白の女王のもとへと逃すため、自らが犠牲になり赤の女王の手下に捕まる。アリスを発見したベイヤードの「もしかしてキミの名前はあの〈アリス〉？」に対して、アリスは「ええ、でもあの〈アリス〉じゃない」と答えるが、それに対して「ハッターは“just any Alice” (ただのアリス) のために自分が犠牲になったりなんてしないさ」とベイヤードは言う (43:20)。

以上に示したシーンからわかることは、ジャバウォッキを倒し、赤の女王を倒す〈アリス〉であることが、アリスが保護される条件となっているという

ことである。言いかえれば、〈アリス〉でないアリスは、赤の女王の手下に傷つけられ、襲われたとしても気を留めるに値しない存在であるということである。

すべての人が他者へと依存しているのだが、薬によって身体が小さくなり、アンダーランドについて把握できておらず、バンダナースナッチ（爪や鋭い牙をもつ怪獣）やジャブジャブ鳥（鉤爪をもつ怪鳥）を含む赤の女王の手下に追われるアリスは、まさに何らかの保護を必要とする存在としてわかりやすい。

バトラーは、他者の生を支えるといった、「わたしたちの道徳的な応答——最初に情動というかたちをとる応答」は、「ある種の解釈の枠組によって暗に統御されて」おり（Butler, 2009=2012, p. 57）、わたしたちは「人であることによってすべての人にそなわっているようなもの」、「普遍的な潜在可能性」として承認可能性をもっているのではない、と語る（Butler, 2009/2012, p. 14）。

バトラーが以上に紹介してきたような「生のあやうさ」や「悲嘆可能性」をめぐる議論を論じる明確な背景として、2001年の同時多発テロ（通称9.11）以降の、対テロ戦争における米軍による、「敵」とみなした国の兵士に対する殺害の肯定や、捕虜に対する虐待等がある。

マッドハッターにとって「敵」である赤の女王の「生」が、その喪失にあたり嘆くに値しないものであることは言うまでもないが、それだけではない。9.11以降のブッシュの政策において顕著なものとなった（しかしそれ以前より実際にはアメリカに存在した）、「テロリストに対峙しない者もテロリストとみなす」という、「敵一味方」の分割の理論があるが、マッドハッターのアリスに対する態度とはまさに「赤の女王と対峙しない者は赤の女王の手下」とでも言えるようなものである。

その生のあやうさが明らかであっても保護されないアリスは、「感知」のみされる存在であって未だ承認へととらない。それに対して〈アリス〉は、保護されるべき存在であり、悲嘆可能な主体としての承認を得た存在である。そして既に記したように、主体が生き延びるためには他者の援助を必要としている。よって、アブソレムの言葉を借りれば、“Not Hardly”⁵であった存在から、“Almost”へと、アリスは〈アリス〉ヘストーリーの展開とともに移行するわけだが、アリスが生存可能な主体として存在するためには、そのように

〈アリス〉へとならざるを得ないような構造がそこにはあるのだ。

2 わたしの非一貫性と説明の不可能性

アブソレムはアリスに「お前は誰だ」と問う。二度目に「お前は誰だ」と問われた際にアリスは、「わたしは〈アリス〉ではない」と答えるが、それは一度目のときのアブソレムの“Not Hardly”という言葉を受けてのものであった。すなわち、アリスはアブソレムの言葉を固定的なものとして捉えている。そうしたアリス自身をはじめ、アンダーランドの住人たちも、アリスと〈アリス〉の関係について、「正しいアリス」か「違うアリス」かと話すように、アリスが〈アリス〉であるか、若しくはアリスは〈アリス〉でないかという二者択一で考えている。しかし、アブソレムは、“Not Hardly”、“Almost”という表現からわかるように、アリスと〈アリス〉の関係を、そうであるか/ないかという視点では考えていない。

バトラーの主体化理論において、主体は、既にある言説に従属することによって逆説的にも主体として成立できるというものであったが、ではこうした主体化＝従属化とは一度行われたらそれで主体は確固たる主体として確立できるのだろうか。答えはそうではないのである。主体化＝従属化は一度行われたら完成するというものではない（Butler, 1991/1996）。

『アリス・イン・ワンダーランド』の設定は『不思議の国のアリス』から13年後であったが、アリスがはじめてアンダーランドへ行った6歳のときの、（アブソレムのモデルであろう）青いイモムシとアリスの以下に示すやりとりには、まさにこうした自己についての一貫した説明の不可能性が表れている。「お前は誰だ」という青いイモムシの質問に対して、6歳のアリスは「わたし—わたしはよくわからないのです、いまは一すくなくともけさおきたときにはわたしがだれかわかっていたのですが、いまはそのときからなんでもかわってしまったにちがいがなくて」と答える（Carroll, 1971, pp. 40–41）。

「首尾一貫したわたし」などではないわたしだが、他方で、アブソレムが、「お前は誰だ」と問い、「わたしはわたしが誰か知っているはず」というアリスの言葉に同意し、また「自分が誰もわからない者を助けることはできない」と話すように、わたしについて説明することが要求される。よって生存可能性

を否定しないためにそこで必要になるのは、将来の可能性を予め排除しないかたちでのわたし自身を説明する方法である（Butler, 1991/1996, p. 123）。

アリスの「わたしは〈アリス〉ではない」という否定が、マッドハッターに森の中で見棄てられるような、すなわち結局のところ生存を不可能にするものとして働いてしまうとき、また、「ニセモノ！恥を知れ！」と非難されるとき（22:07）、アリスはどのようにして、〈アリス〉という呼びかけ（名指し）へと応答できるだろうか。

しかし、そのように問いを投げかけてみたものの、実はアリスの場合は、そのような生存の可能性を予め排除しないかたちでの応答をすることが比較的容易であるのかもしれない。それは言うまでもなく、アブソレムの“Not Hardly”や“Almost”という言葉である。オラキュラムに描かれる〈アリス〉を前にして、それが自分ではない他人であるという意味ではなく、ひとつの主体の将来において期待される主体化の可能性を残す意味で、「（今のわたしは）極めて遠い（アリスです）」と答えられるかもしれない。それは一貫した自己を説明しろという要求に対して、「今」という限定した答えでありながら、しかし“Not Hardly”という言葉によって、将来への可能性が生じる。すなわち、限定された「今」を語りながら、「今でない時」の可能性を同時に担保しうるのだ。⁶

しかし他方でどうであろうか。アンダーランドというフィクションの世界に在るわけではないわたしたちにとって、そのような“Not Hardly”という応答は、果たして可能なのだろうか。

先にわたしが提案しておきながらではあるが、“Not Hardly”という形での応答というのは不可能なものとして映ったのではないだろうか。それは非常に単純な疑問である。それは、一方では、どのようにして名指され、「期待」されうるものとの距離をわたしは知りうるのかというものであり、他方では、そもそもわたしは「期待」されうるものへと近づくことができるのか、なれるのか、ということである。

そしてこの疑問こそがアンダーランドというフィクションの場とわたしたちの生きるこの世界をわけるものであり、アリスが〈アリス〉になることと、わたしたちがわたしたちに先行する言説によって名指され呼びかけられる際に、その「名」へ従属化することによって主体化することをわけるものである。

3 フィクションでないわたしたちの可能性

バトラーはわたしたちの主体化を、例えば「女性」という規範的なカテゴリーとの関係において以下のように説明する。

バトラーが『ジェンダー・トラブル』における「セックスは、つねにすでにジェンダーだ」という言葉で示すように (Butler, 1990/1999, p. 29)、実際には様々な差異のあるわたしたちだが、わたしたちは生まれると同時に（現代では多くが母胎のなかにいるうちに）「自明の生物学的性 (sex)」⁷ という規範に則り男/女と名付けられる。そして、例えばそこで「女」と名付けられた主体は、その先ずっと「女」として呼びかけられることになる。そうしたときに主体は、「生存できる主体として資格を得、存続していくためには規範を「引用」するよう強いられる」こととなるのである (Butler, 1993/1997, p. 166)。もしここで、その「女」と呼びかけられた主体がそこで「女」という規範の「引用」を拒んだとき、その主体は何らかの罰を与えられることとなる。「ジェンダー規範を引き受ける「己」は存在しない」、むしろ、「この主体構成がジェンダー規範を正当化するような先んじている作用によっているところでは、ジェンダー規範の引用」が、主体が「己」として資格を得るために必要である、つまり「己」として生存するために必要である」のだ (Butler, 1993/1997, p. 166)。

そしてアンダーランドにおいて、アリスが〈アリス〉を否定することが結局アリス自身の生存の不可能へとつながることから、拒否したり否定したりできないことと同様に、わたしはそうした「女」という呼びかけ（名指し）を否定できない。すなわち、わたしたちは、既に度々述べてきたように、そうしたわたしに先立ち存在する言説による名指しを拒否できないのだ。

対して、アンダーランドで期待される〈アリス〉とはどのような存在であったか思い出してほしい。〈アリス〉とはオラキュラムに描かれたものであった。そしてオラキュラムとは、はじめの日から全ての日について描かれた暦、すなわち確実な未来について描かれたものである。また、〈アリス〉とは、マッドハッターが、〈アリス〉であると確信しているアリスに対して「前はもっとすごかった」と表現するように (38:24)、〈アリス〉は未来の存在であると同時に、それは6歳のころのアリスの将来として位置づけられている。すなわち、

アンダーランドへ来た当初、アリスはそれを夢の中の出来事だと思っていたが、フラブジャスの日の前日にアブソレムとの会話の中で思い出したように、(記憶がよみがえったように)、もとをたどれば、〈アリス〉とは6歳のころのアリスの将来、すなわちアリスの将来なのである。

すなわちアリスと〈アリス〉の関係が、ある種「予定調和」的で、そして〈アリス〉がそもそもアリスの未来であったということは、根本において、アリスと〈アリス〉という名指されるものは通約不可能な関係ではなかったのである。

しかし、「わたし」と、わたしを名指す「女」というものの関係はどうであろうか。バトラーは、幼いころの手術によってペニスを失い当時の性科学者の助言に従い女性として育てられたが、後に自身で生きる性別を決めた少年デイヴィッド・ライマーの言葉に言及し (Butler, 2004, pp. 71–73)、次のように語る。「彼 [デイヴィッド] が誰であるかと、彼が [脚の間に] 何をもっているか [外性器が何であるか] との間には通約不可能性 (incommensurability) が存在しており、また彼がもっているファルスと、それが期待されるものとの間には通約不可能性が存在している (そしてその点において、ファルスと共にある [もっている] ほかの人と [デイヴィッドに] 違いはない [ファルスに関してほかの人との違いは存在しない])」 (ibid., pp. 72)

すなわち、わたしたちは出生とともにその外性器の特徴によって名指され、そうした名指しにおいて期待される規範を引用・反復することによって生存可能となるわけだが、他方でこの性器にもとづく名指し「女」と「わたし」の関係はそもそもが通約不可能なのである。本来的に通約不可能であるにもかかわらず、そうであれ/それになれという無理な要求が、わたしたちには課せられているのだ。

そして逆説的にもこの通約不可能であるというところに、主体化するには同時に既にある規範へと従属化しなくてはならないという主体化の構造において、わたしたちを圧倒的に束縛する規範を揺らがせる (ずらす) 可能性が、また他方で倫理的な応答の要請が、生じるのである。

名指しされる「わたし」と、その名指す内容が通約不可能であると述べたが、しかしそうした名指しの言説、すなわち規範というのもまた「わたし」と

同様に確固たるものとして存在しているわけではない。バトラーが「強制的な異性愛、言い換えれば存在論的に強化された「男」「女」という幻影は、基盤、オリジン、現実の規範的な尺度を気取る脚色と演出による外見にすぎない」、「ジェンダー」とはオリジナルのない一種の模倣だ」と語るように (Butler, 1991/1996, pp. 124–125)、それ自体が強制する模倣によって、引用・反復されることによって成立しているものである。そして、そうした性質というのは逆説的にもその強制する引用・反復によって不安定なものとなるのである (Butler, 1991/1996)。バトラーの代名詞ともいべきパフォーマティヴィティとはそのような、わたしを強制的に従属させつつ、しかしそうした性質故に逆説的にも揺らがされることへ可能性を見出すものであった。

そして倫理的な応答の要請というのは、例えば『自分自身を説明すること』におけるバトラーの議論を受けて大河内泰樹が述べるような、非一貫性である主体に判断を下すことの暴力性に対して、「重要なのはそこで判断しないことではなく、その判断に伴う責任を引き受け、さらにその判断を変更することについて常にひらかれていることではないだろうか」ということであろう (大河内, 2006, p. 149)。⁸

すなわち、アリスが〈アリス〉に将来なるかもしれないというかたちで判断を保留するのではなく、むしろ、〈アリス〉にならないアリスをアリスとして承認するということである。そしてそれと同時に、アリスという名も既に名指されたものであり、かつアリスという存在自体が確固たるものとして確立したものではないということに対して、その意味で判断を保留することが求められるのである。

4 おわりに

先に『不思議の国のアリス』より、6歳のアリスと青いイモムシのやりとりを引用したが、引用箇所ของすぐ後に、アリスはそうに確固とした「わたし」がないことを“queer”と表現する (Carroll, 1971, p. 41)。そして6歳のアリスがアンダーランドに足を踏み入れたとき「すごく奇妙な世界 (Curiouser and curiouser!)」と言うのと同様に (Carroll, 1971, p. 16)、19歳のアリスもアンダーランドに迷い込んだとき「すごく奇妙な世界 (Curiouser and

curiouser!）」と口にする（18:50）。

デイヴィッド・ハルプリンは「クィア」という語について、「規範に対して対立関係にあることによって意味を持つ。正常な、正統的な、支配的なものとぶつかるものならなんでも、定義上クィアである」と述べる（Halperin, 1995/1997, p. 92）。“queer”と“curious”を安易に同じものとして語るべきではないが、しかし、“curious”という語もまた、「正常な」ものからはずれた存在を指す語であることを鑑みると、両者の間にある種の共通性が見えてくる。

アリスが自分自身について説明できないことを、一貫した自己でないことを、笑ったり消えたりするネコや、言葉を話すイモムシと同様にアンダーランドにおける「奇妙な」事象としてわたしたちは捉える。しかし、アリスが自分自身について満足に説明できず、“Not Hardly”から“Almost”へ移行することは、実際には、アンダーランドに特有の奇妙なことではなく、むしろ、現実を生きるわたしたちの身体へのバトラー的な理解へと重なる。

本稿では扱わなかったが、「奇妙な」アンダーランド内においても、赤の女王の頭が大きいことが度々揶揄される（32:15等）。また、赤の女王のご機嫌とりをしていた者たちが、わざと（耳や鼻を大きく見せるために）付け耳や付け鼻、お腹に詰め物をするなどをし、そして赤の女王から白の女王の側へと寝返る際に、それらは外（さ）れる（74:10）。これらが含意することは、「奇妙な」世界のこととしても容易に受け入れ難いようなものとして、頭が非常に大きいこと等が位置づけられているということである。マルグリット・シルドリックは「怪物的な身体」とクィアの連続性を論じるが（Shildrick, 2002）、笑うネコや言葉を話すイモムシが、容易に完全なファンタジーとして外部化できる、いわば「正常」に対して無害な、受け入れられるようなクィアネスであるのに対して、頭や耳、鼻等が「異常」に大きいことは、（「異常」とはいえ、）話すイモムシに比べてより現実味があり、「境界」を揺らがすような「奇妙さ」であるのだ。一貫した自己や、またそれについて満足に説明できるという「幻想」をはじめ、「正常」と考えられるものは常に「異常」を排除することによって成立している（Butler, 1991/1993）。アンダーランドという地上の世界の「外部」へと「奇妙さ」を追いやることで、わたしたちは「正常」の「幻想」の中に居たままにして、その「奇妙さ」を享受するが、しかしそれでもな

お受け入れ難い「奇妙さ」がそこには存在するのだ。

清水晶子は現在の日本において必要とされるクィアな思考を、「個別な「身体の奇妙さ」への拘泥」、そして「「奇妙な身体」を区分けする境界線への問い直し」であると述べる（清水, 2013, p. 219）。こうした清水の主張に対して、アリスの説明不可能な身体がアンダーランドの奇妙なものとして位置づけられ、映画として消費される一方で、実はそれがわたしたちの身体への説明不可能性と非常に重なるものであるということは、こうした「境界線を問い直す」ことへと通じるのではないだろうか。

Footnotes

- ¹ Zanuck, Richard D, Joe Roth, Suzanne Todd & Jennifer Todd. (Producer)., Tim Burton. (Director)., & Linda Woolverton. (Writer). (2011). 『アリス・イン・ワンダーランド』. 日本:ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社 = (Original work produced 2010). *Alice in Wonderland*. U.S.: Walt Disney Pictures. [DVD of motion picture].
- ² 本稿では、オラキュラム (1.1 参照) に描かれた、ジャバウォッキーを倒すアリスを〈アリス〉と表記し、それ以外の、アンダーランドへ迷い込んだアリスは、〈印をつけずに〉アリスと表記する。
- ³ DVD における場面の凡その時間を示す。
- ⁴ 邦訳は DVD における日本語字幕を適宜参考にしたが、すべて拙訳である。
- ⁵ “Not Hardly” は “hardly” と意味を同じくするが、他方でこの二重否定という形式によって、単に否定的な意味をもつだけでなく、むしろそこには肯定の意が暗示されているとは読めないだろうか。
- ⁶ 清水晶子は、映画『Let's Love 香港』における登場人物チャンの、ゼロによる「あなたはキリンのようだ」という呼びかけに対する、それを承認しつつ同時に否認するような二重の身振りの分析を通して、「自己の現在と未来との存在の変容の可能性を、生き延びさせる」ことについて論じている (清水, 2006)。
- ⁷ 所謂社会的に構築されたものとしての “gender” と対をなすものとして。
- ⁸ 大河内は論文の冒頭に『不思議の国のアリス』を引用する。本稿はそれに触発されたものでもある。

References

- Butler, Judith. (1997). 「批判的にクィア」. 『現代思想』 25 (6) (マリィ, クレア, Trans.). = (Original work printed 1993) *Critically Queer. Bodies That Matter: On the Discursive Limits of 'Sex'*. New York: Routledge. 159–177.
- Butler, Judith. (2012). 『戦争の枠組―一生はいつ嘆きうるものであるのか』 (清水晶子, Trans.). 東京: 筑摩書房. = (Original work published 2009). *Frames of War: When is the Life Grievable?*. London: Verso.
- Butler, Judith. (1999). 『ジェンダー・トラブル―フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 (竹村和子, Trans.). 東京: 青土社. = (Original work published 1990). *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge.
- Butler, Judith. (2008). 『自分自身を説明すること―論理的暴力の批判』. = (Original work published 2005). *Giving an Account of Oneself*. New York: Fordham University Press.
- Butler, Judith. (1996). 「模倣とジェンダーへの抵抗」. (杉浦郁子, Trans.). 『イマージュ』, 7 (6), 116–135. = (Original work printed 1991) *Imitation and Gender Insubordination*. In Fuss, D (Ed.). *Inside/out Lesbian Theories, Gay Theories*. New York & London: Routledge, 13–31.
- Butler, Judith. (2007). 『生のあやうさ―追悼と暴力の政治学』 (本橋哲也, Trans.). 東京: 以文社. = (Original work published 2004). *Precarious Life: The Power of Mourning and Violence*. London: Verso.
- Butler, Judith. (2004). *Undoing Gender*. New York and London: Routledge.
- Carroll, Lewis. (1971). *Alice's Adventures in Wonderland and Through The Looking-Glass — and What Alice Found There*. London: Oxford University Press.
- Harpelin, David. (1997). 『聖フーコー: ゲイの聖人伝に向けて』 (村山敏勝, Trans.). 東京: 太田出版. = (Original work published 1995). *Saint Foucault: Towards a Gay Hagiography*. New York and Oxford: Oxford University Press.
- 大河内泰樹. (2006). 「規範という暴力に対する倫理的な態度―バトラーにおける「批判」と「倫理」」. 『現代思想』, 34 (12), 140–151.
- Shildrick, Margrit. (2002). *Embodying the Monster: Encounters with the Vulnerable Self*. London: SAGE Publications.
- 清水晶子. (2006). 「麒麟のサバイバルのために―ジュディス・バトラーとアイデンティティ・ポリティクス再考」. 『現代思想』, 34 (12), 171–187.

清水晶子. (2013). 「奇妙な身体/奇妙な読み—クィア・スタディーズの現在」. 『現代思想』. 41 (1), 216–219.

The Possibility of Failing to Live Up to Expectations
—Reading *Alice in Wonderland* through Judith Butler's Theory of Subjectivity
Mai IGARASHI

Using Judith Butler's theory of subjectivity, this paper discusses views of the variation in Alice as a subject. This variation is an attempt to blur both the boundary and the relationship between an incoherent body in a "curious" world and our bodies as we exist in the real world.

The film "Alice in Wonderland" takes place 13 years later than the children's novel *Alice in Wonderland* and *Through the Looking-Glass*. Underland is still regarded as a "curious" world (when Alice was young, she misheard "Wonderland" as "Underland," so she calls it Underland in the movie). Alice's arrival in Underland was anticipated; the Savior Alice was foreseen as a girl who would defeat the evil and bring peace to the Underland. Thus, Alice, who is lost there, is asked if she is the "Alice." Despite her initial firm denial, residents there are intent upon calling her "Alice." Ultimately, she defeats evil, which conforms to the prophesied image of "Alice."

In the film, the repeated question "who are you?" and the difficulty of answering that question adequately, as well as describing the body with phrases such as "not hardly" and "almost" appear "curious" to the viewer. However, if one analyzes using different perspectives, including Butler's theory of performativity, it becomes clear that that "curiousness" relates to our bodies in the real world, rather than merely the world of the fantastic.

Keywords:

Judith Butler, subjectivity, incommensurability, curiousness-queerness, incoherent subject